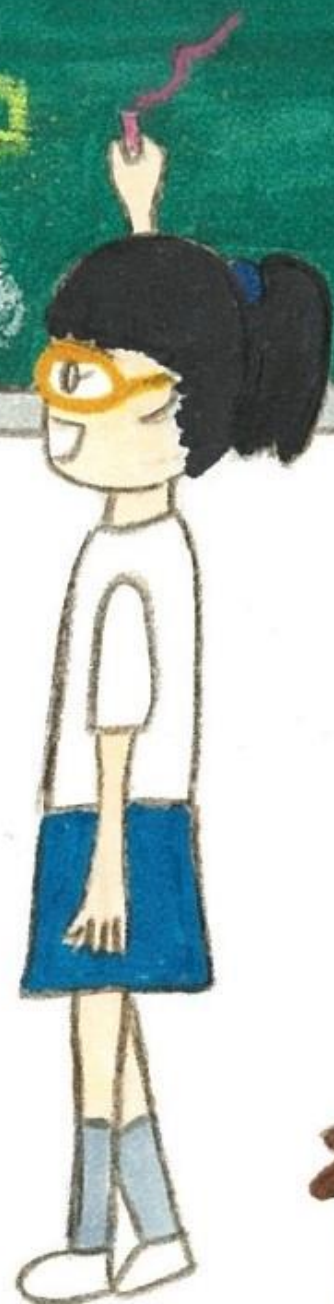
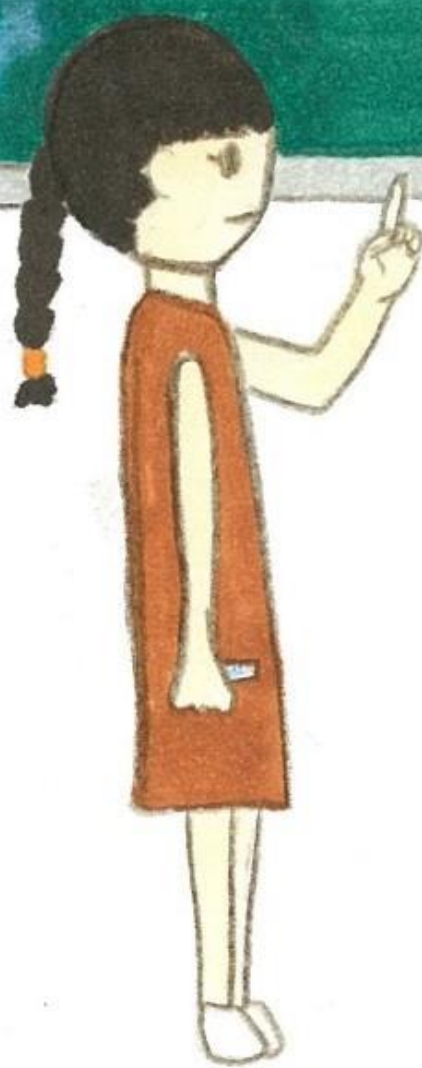


「僕の100点は
みんなの100点で
できている。」



え...みんなの
作はなんだ



ぼくの100点は

みんなの100点できている

ばなな先生 作

チャイムのメロディーにのせて、
だれかのかえ歌が聞こえた。

「♪ めんどういテスト

めんどうい漢字。

漢字なんていらねえ

消えろ この世から ♪」

ぼくが、国語の教科書を机の上にならべおえると、
ばなな先生が入ってきた。

「なあ、みんな。

今度の漢字テスト、クラスの全員で

100点とってみたくないかい？」





先生は、一人ひとりの顔色をたしかめるように何回かいった。

ばなな先生、

ぼくら4年2組のたんにな。

楽しいことが大好きなおもしろい先生。

だけど、いつも、とつぜん変なこというんだ。

「全員で100点？」

そんなのムリさ。オレがいるんだぜ！」

勉強が大っきらいで、ケンカっぱやい黒田君が

笑いながら声をあげた。

みんなも笑った。

でも、ぼくもそう思う。

だって、50問も漢字がでるんだよ。

10問のミニテストだって、

かんたんに100点がとれないのに……。

ぼくはふり返ってみた。

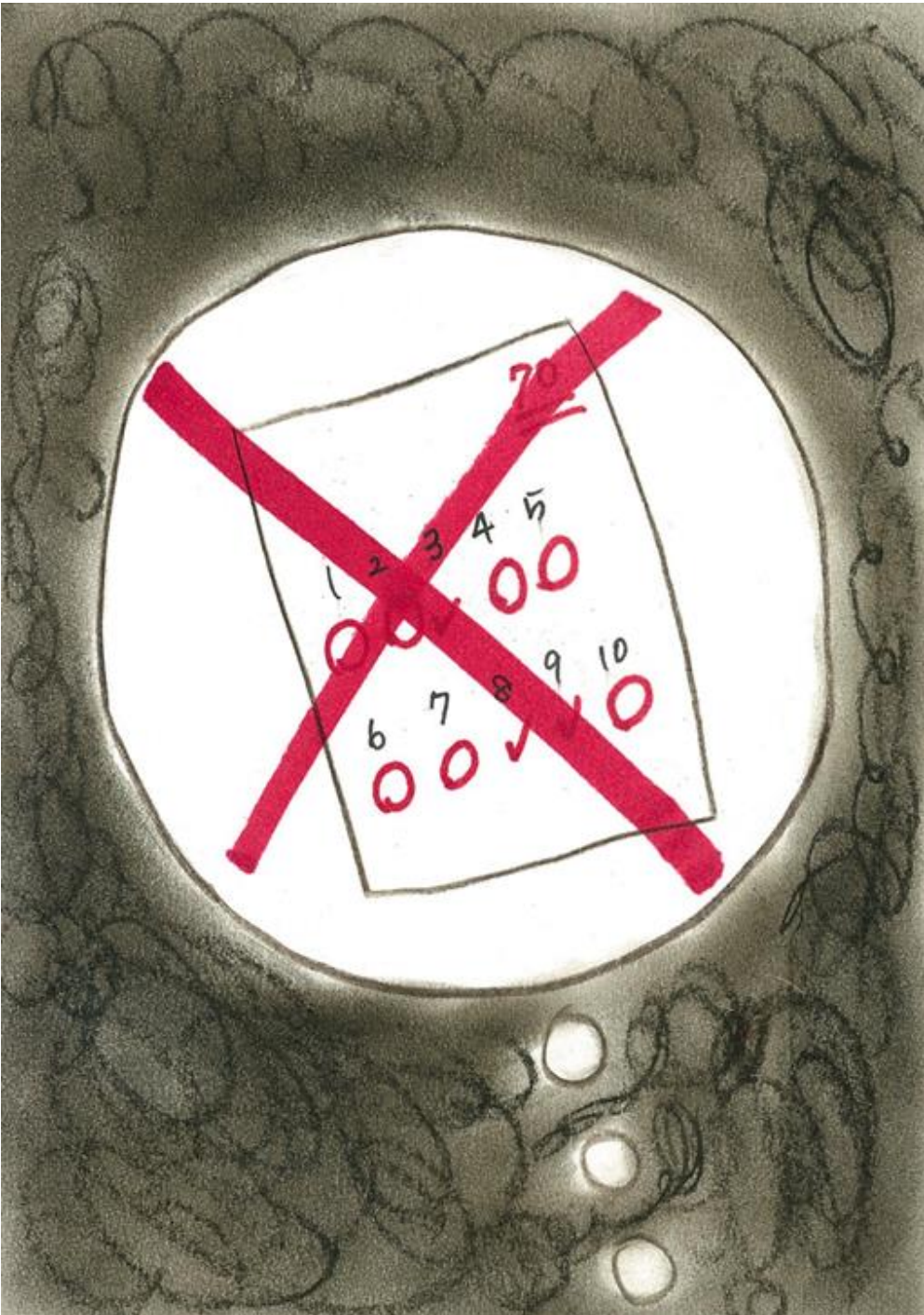
50問の漢字テストで、

100点をとったことが一度もない。

「まあ、やってみないとわからないよ。

まずは『やる』って決めるところからだ。」

と、ばなな先生。



ばなな先生になって、「四つのルール」というのができた。

一、やるのか やらないのか どちらか選べる。

二、やると決めた子は 自分で決める。

人のせいにならない。

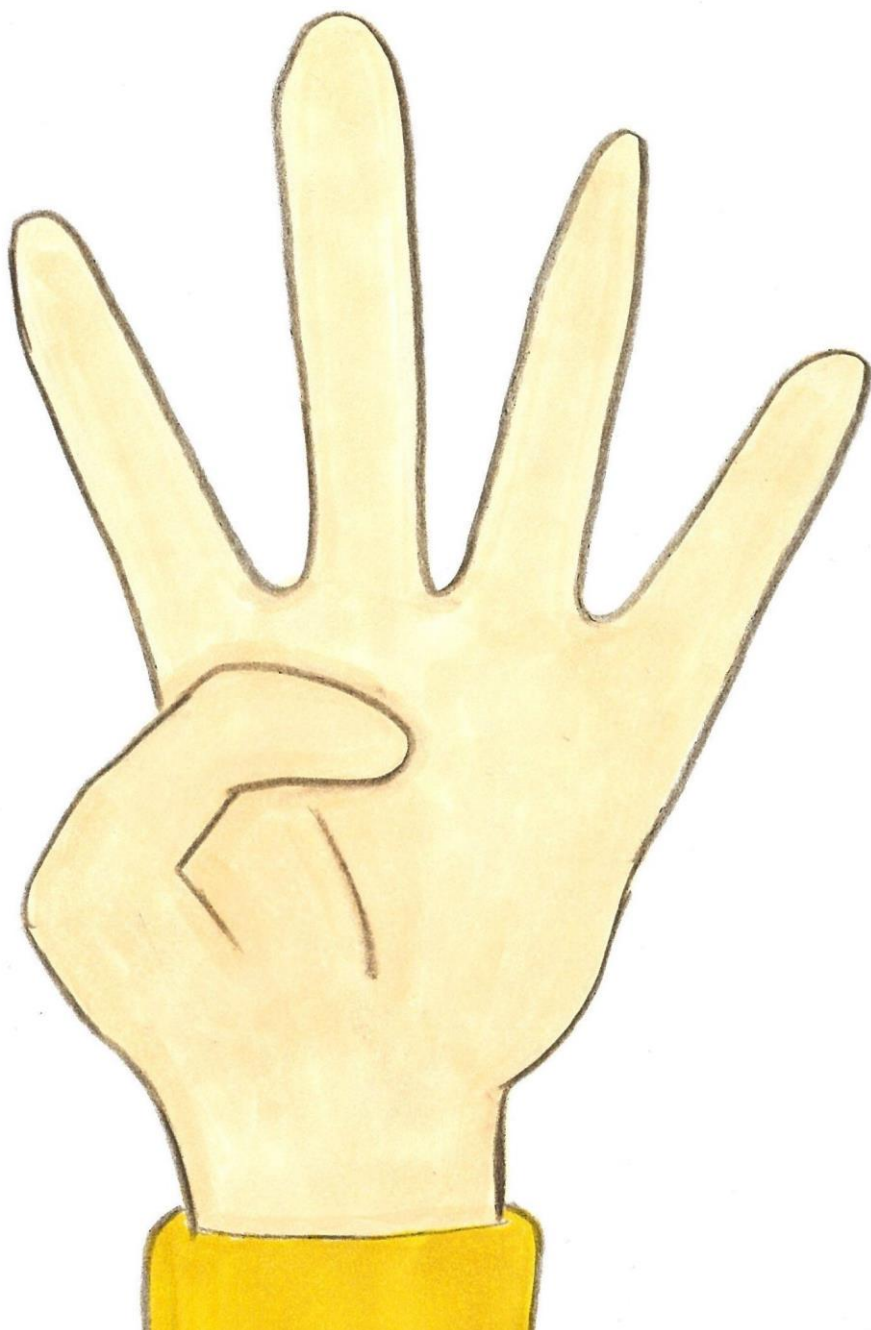
三、やる と決めたら 最後までやる。

途中でやめるときは「やめます」という。

四、本人が全力でやったら 結果はどうでもいい。

やることもやらないことも、大切にされる。

先生に言わせると「コミット」っていうらしい。



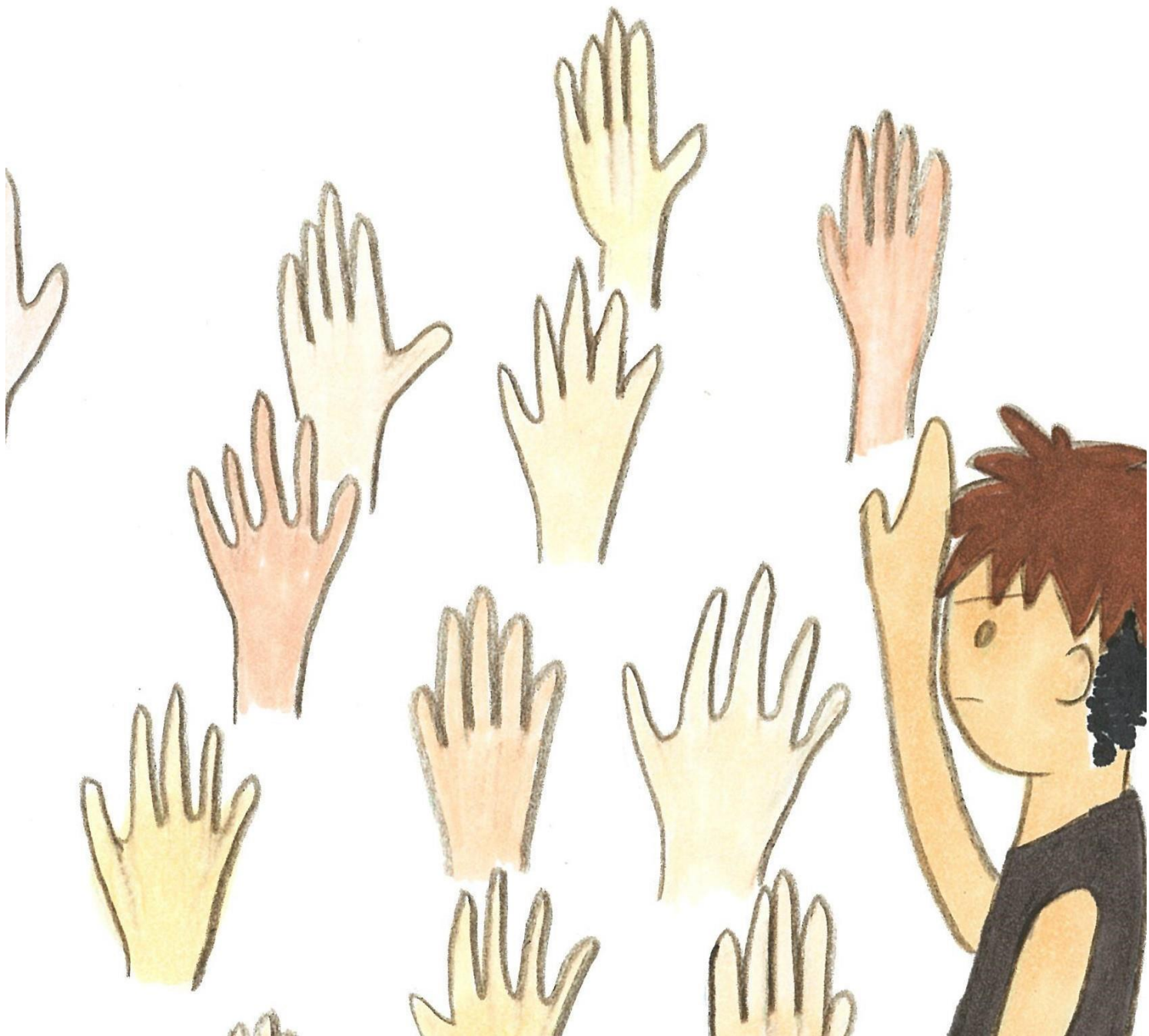
テストということもあって不安なのか、
手をあげた子もまわりを見ていた。

あれ、黒田くんもすました顔で、手をあげている。

(……、しょうがない。)

ぼくも手をあげた。

テストは2週間後に決まった。



「みんなの気持ちを一つにして、当日をむかえよう！」

と、みんなの提案で実行委員がつくられた。

そして、名前を「テスト」ではなく、

「漢字祭り」にしよう、とも決まった。

委員長は、とつてもまじめな沢井さんが、りっこうほした。

「委員長として、全力でやります。」

沢井さんが、あいさつした。

(いつもがんばりすぎちゃうから、大丈夫かな……)
ちよつと気になった。



すると、先生がテストの問題と答えをわたしはじめた。

「えっ、テストじゃないの？」

教室がざわついた。

「普通にやるんじゃないか、

ちよつと変わったことをしよう。」

ばなな先生が、にんまりと笑った。

卜 答え

静	塩	加	果	約
愛	未	勇	束	別
陸	票	然	利	鹿
所	辞	材	達	件
良	特	菜	熱	借
爽	茨	試	井	



「テストが終わったら先生の机まで来てください。その場で丸をつけます。
100点をとった子だけ、まだテストの終わってない子に一画、赤えんぴつで、
ヒントをかきくわえられます。」

教室がざわざわした。

「これなら、漢字の苦手な子も助けてもらえるでしょ？」

全員で28人いるから、みんなが協力すれば

27画も書いてもらえます。得意な子も苦手な子も、

みんなで100点めざすんです。」

「そんなのテストじゃない。」

「……、なんかソソしている感じ。」

うしろの方でつぶやく声が聞こえた。

「そうだね。」ばなな先生が笑った。

「テストは自分のためって思っているからね。」

でも、それをみんなのためにもやってみるんだ。おもしろいよ、きっと。」



(みんなのためか……)

ぼくは、勉強がきらいだった。

とくに漢字はだいきらいだ。

でも、クラスみんなのためなら

書けるような気がした。

ぼくは、

ちよっぴりがんばってみよう、と思ったんだ。



やっぱり、というか、

黒田君だけノートを出していない。

「黒田、漢字は？」

「あつ、先生、広告のうらに練習したんです。

えっ、その紙を見せろって？すてちゃいましたよ。」

すずしげな顔をして、笑っている。

クラスの中には、

「広告のうらに書いた。」という子もいれば、

「嘘だよ。」って、いう子もいる。

「何うたがってんだよ。うぜえんだよ、消えろ！」

黒田君は、嘘だって言う子に、なぐりかかっていた。



一方、沢井さんは、
毎日、二時間いじょう練習をしているらしい。

「実行委員長だからね。がんばらなきゃ。」って、いうのが口ぐせ。

お風呂から出ても心配で漢字練習をしているらしく、
手のこうが鉛筆の粉で、まっ黒になっていた。

おまけに、毎日黒田くん「漢字練習した？」って聞いていた。

「うぜんだよ、実行委員だからってちようしにのるなよ。」

黒田くんは、毎日そう答えた。

ぼくは、沢井さんをすごいなあと思った。

そして、一番先に漢字テストをおわらせて、100点をとるんだろうなって、思った。

沢井さんに助けてもらえるという安心感があったが、

それいいのところをまちがったら大変だと、ぼくはいつもより練習した。



あつというまにテストの前の日になった。

実行委員長の沢井さんが 帰りの会で手をあげた。

「みんな、明日テストだよ。練習のせいかをだそうね！」

って、声をはりあげた。クラスにきんちょうした空気が流れた。

でも、黒田君だけはいつもの調子で、

「早く帰りてえ、ゲームしてえ。」って言ってる。

(本当に練習してるのかな…)

帰りぎわにぼくは勇気を出して声をかけた。

「黒田君。」

「あん？」

「あの子、明日の漢字……。」

「オマエもそんなくだらないこと言うの？」

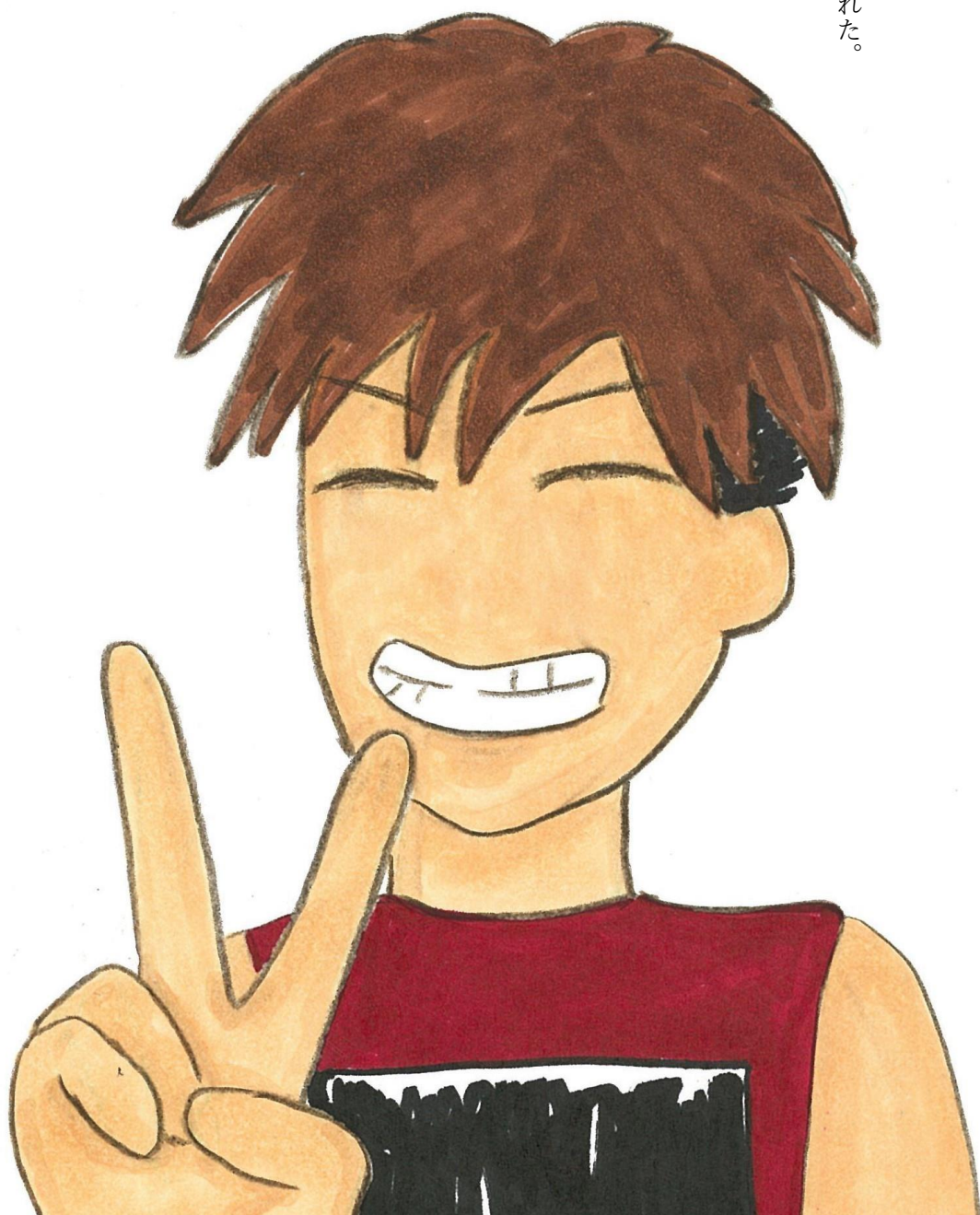
みんなが手伝ってくれるんだろう？

50問テストで27問も教えてくれるんだろう？

楽勝じゃん、そんなの。」

黒田君がランドセルをせおった。

「えっ……？」びっくりした。ルールをかんちがいしているようだった。



テストの本番になった。

「みんなで100点、とるぞっ！」

沢井さんのかけ声で、みんながテストをうらがえした。
しずかな教室に、鉛筆のカリカリっていう音がひびいた。

10分もしないうちに、林さんが終わった。

クラスで一番、勉強のできる子だ。

『パーフェクトウーマン』って男子がよんでいた。

前にすたすと出て行って、先生に丸をつけてもらっている。

「100点だ、おめでとう。」

「はい。」

ふりかえった林さんは、ちっとも喜んでいなかった。



みんなが林さんを見て、口パクで「おしえてくれ」って言っている。

パクパクとみんなが口を動かして、テストを出しているすがたは公園の池のコイみたいだ。それを見た林さんは、ちよつといやな顔をした。

「テストは自分でやるんでしょ」って、小さい声でいった。

ぶすつとしたまま、それでも何人かの机をまわって、一画ずつヒントを出した。

でも、漢字の苦手な矢野さんという女の子のところはスルーした。

どうしてだろう？

そういえば、前にこんなことをいってたのを思い出した。

「あの子、もっと練習した方がいい。

漢字なんて、練習すればだれでもできるのにさ。

悪いけど、矢野さんって、なまけものなんだよね。」



みんながどんどん100点をとっていった。

いつも以上にみんなが嬉しそうな顔をしている。

ハイタッチしたり、他の子のところにいちもくさんにかけつけて

ヒントをだしたり、黒板にあと何人でクリアって書いたり、

なんだかいつもよりクラスがまとまりかけてる。

そうか。

同じ目的にチャレンジしているからなんだ。

気づくと、黒田君だけがまっさおな顔をしている。

「なんだよ、黒田、ほとんど書いてねえじゃないか。

練習してねえんじゃないか？」

「ぎげんな。練習、やってんだよ。そんなこというなら、ここから消えろ！」

きつ、と助けに来た友達をにらみつけた。



やがて、沢井さんが、先生のところに行った。

みんなが手を止めて、先生の机を見た。

だれもが100点だとうたがわなかった。

とつじよ、先生のペンがとまった。

先生が、ものすごく悲しそうな顔をした。

98点

一間2点のテストの、たった一間のミスだった。

沢井さんは、机に戻ると泣いた。

「沢井さん、一画書き忘れただけみたい。」

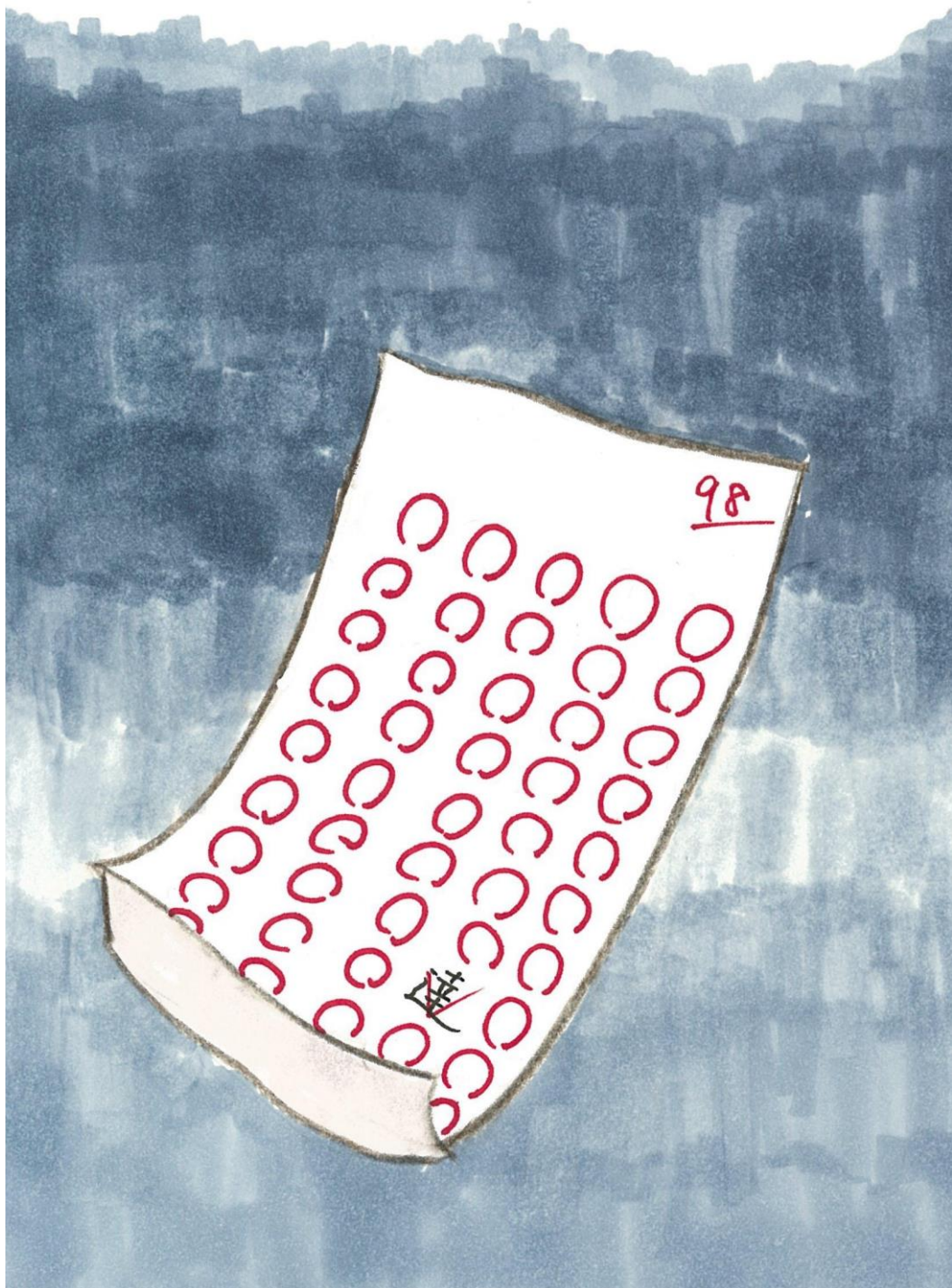
先生もおまけしてあげたらいいのに。」

そんな声が、聞こえてきた。

ふりかえって沢井さんを見ると、

泣きながら間違った字を、

何回も何回もノートに書いているのが見えた。



「おいつ、わからないところあるか？ 助けに来たぜ。」

ぼくは、もやもやした気持ちで、沢井さんが間違った字を指さした。

「がんばれよ」赤鉛筆で書かれた字を見ると、

さっきまで思い出せなかった字が、きゆうに思い出せた。

ぼくは、救援にきた子のチカラを借りて100点をとった。

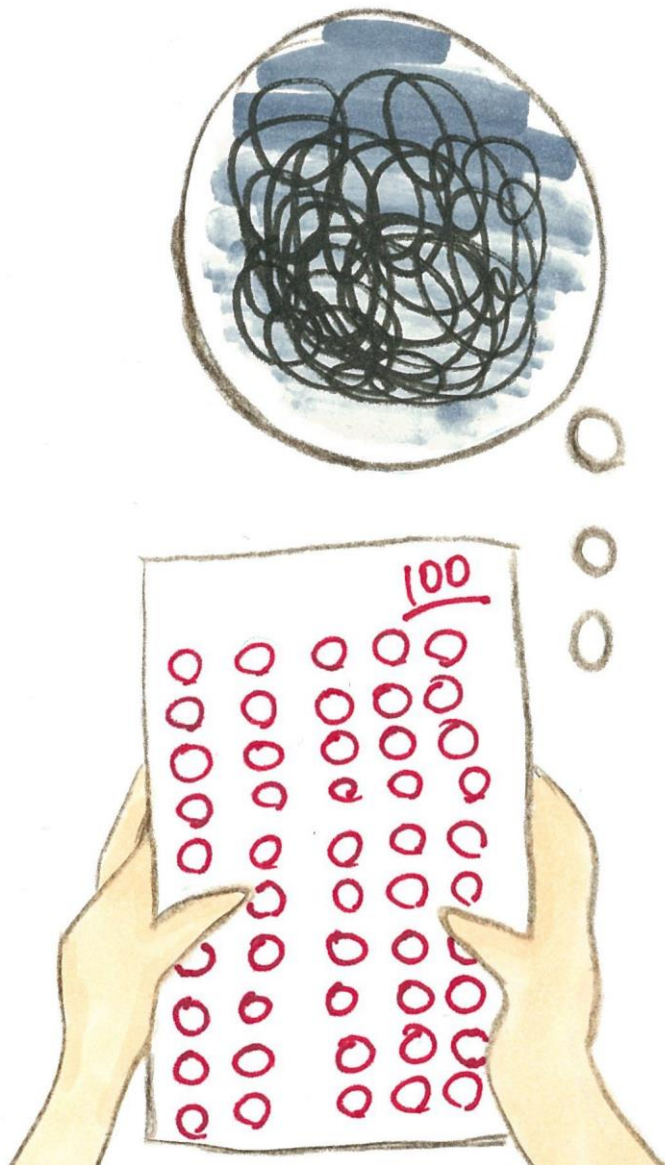
初めてとれた漢字テストの100点だった。

けれど、なんかもやもやした…。

「ルールだからな。100点にならなかつたんで終わりだ。」

先生もくやしそうな顔をした。

みんなもいっしゅんにして、しおれたようになった。



テストで100点をとれなかったのは、黒田君、漢字の苦手な矢野さん。
そして、委員長の沢井さんの3人だけだった。

「せ、せんせい……。」

沢井さんが、しゃくりあげながら手をあげた。

「み、みんなに話したいことがあるんです。」

ゆっくりと前に出てきた。

教室がきゅって、きんちようした。

沢井さんが、ふう、と息をはいた。

「みんな、今回は、わたしのせいで、本当に、本当にごめんなさい。」

頭をさげた。

涙の粒が床に落ちた。

みんな苦しそうな顔をしていた。

ぼくも、沢井さんの方を見ることができなかった。



「わたしもごめんさい」やがて矢野さんまで前に出てきてあやまった。

「矢野は漢字が苦手だから気にすんなよ」だれかがかばう。

すると、教室はますます息苦しくなった。

やがて、視線が、黒田くんの方に流れていった。

「おまえら、な、なんだよ。じろじろみるなよ。」

黒田君は、一番近くの男子をにらみつけた。でも、観念したように立ちあがった。

「な、なんだよ………。おれもいけばいいんだろ」

「くそっ、……、やるって決めたのは俺でした。やめるっていいませんでした。

なのに、練習一分もしませんでした。ご、ごめんよ。」

黒田君はぶすつとしていた。

だれかが「先生、もう一回やりたい。いいでしょ」って、言いだした。

いっしゅんにして教室中が息をふきかえたようになった。

「やらせてください」「お願いします」って声があちこちからした。

「お願いします」沢井さんも頭をさげた。

「実行委員長も続けさせてください」

「もちろんだよ」先生は笑った。

「1回で全員が100点、っていうルールじゃないしね。」



それから、みんなは本気になった。

宿題の練習では、だれもがびっしりと漢字を書いてきた。

一番びっくりしたのは黒田君だ。

休み時間に沢井さんと漢字練習を始めた。

先生からテストの紙をもらって、毎日10個ずつミニテストをしていた。

「いいぞ、黒田君、○だ。」

沢井さんは、花丸を書いてあげた。

「よしよし」沢井さんが頭をなでると、黒田君はうれしそうだった。

「そういや、おれ。漢字ってちゃんと書いたことなかったな。」

漢字って、人のために書くんだな。」

黒田君の言葉は、ふかかった。



矢野さんもまた、毎日、毎日練習していた。

休み時間はいつも漢字を書いていた。

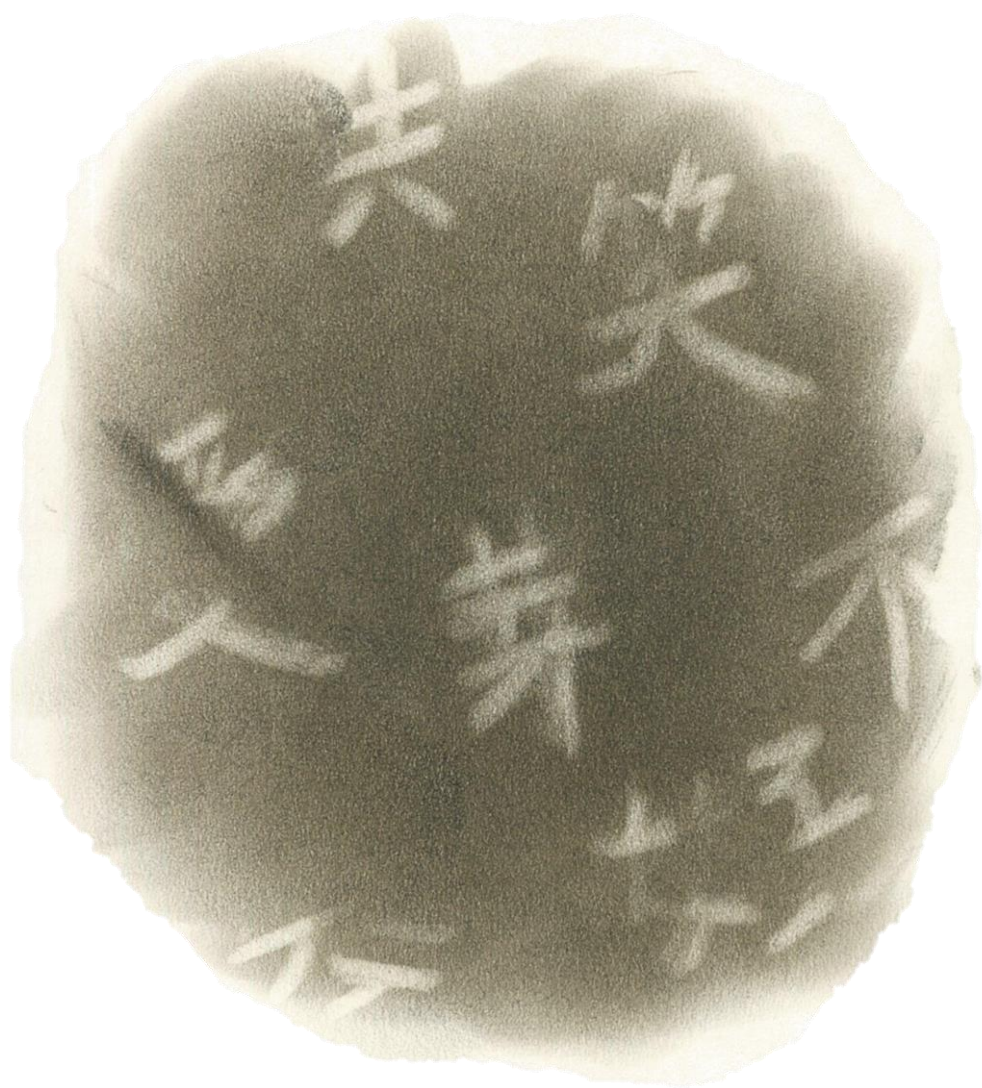
矢野さんは、漢字を書いても書いてもすぐに忘れてしまうセイシツなんだと、

テストの後に聞いた。

前だって、ものすごい量の漢字を練習していたらしい。

ぼくは悪いことをしたと思った。

みんなでテストをするってことをしなかったら、知らないままだった。



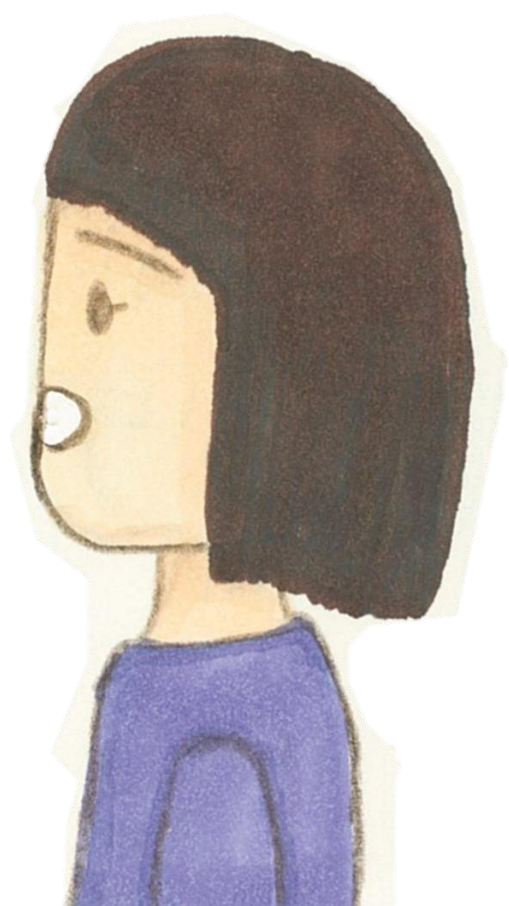
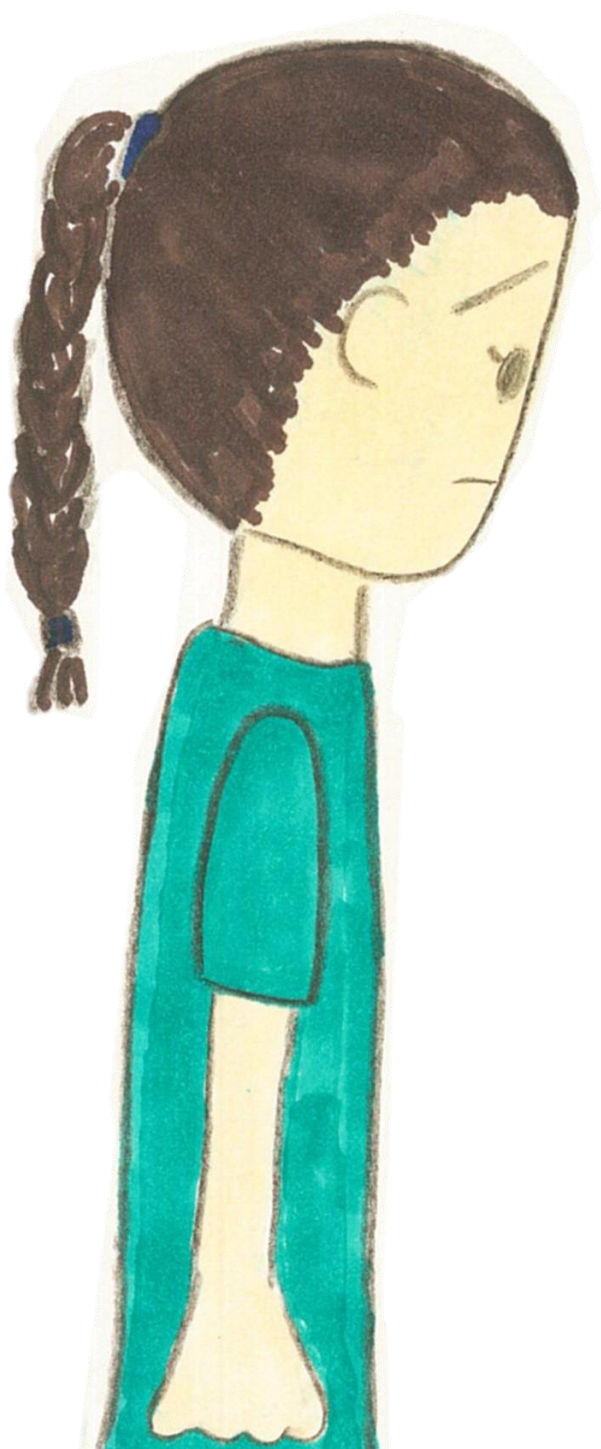
「矢野さん。」

林さんがてれくさそうにやってきた。

「あ、あのさ。い、今までごめんね。よかったら漢字おしえさせてくれないかな。」
「えっ。」

矢野さんはびっくりした顔をした。

じつは、林さんは、あれから先生に呼ばれていたらしい。



「林さんは、だれとだれのところに行って一画かいてあげたのかな？」

先生の目がぎよりと動いた。

林さんは答えられなかった。

じつは、数人に書いてから林さんはすみっこで本を読んでいたのだ。

先生はそれをしからず、こんなことを言ったらしい。

「林さんはずっと一人でかんぼってきたんですね。」

林さんは泣きだしたらしい。

「もし、林さんがよかったら、そのすごいチカラを

必要としている人のためにつかってあげてください。」



林さんの教え方は、ものすごくうまかった。

しょうじき、ばなな先生よりはるかにうまかった。

「漢字は、部首とつくりがあるんだよ。」

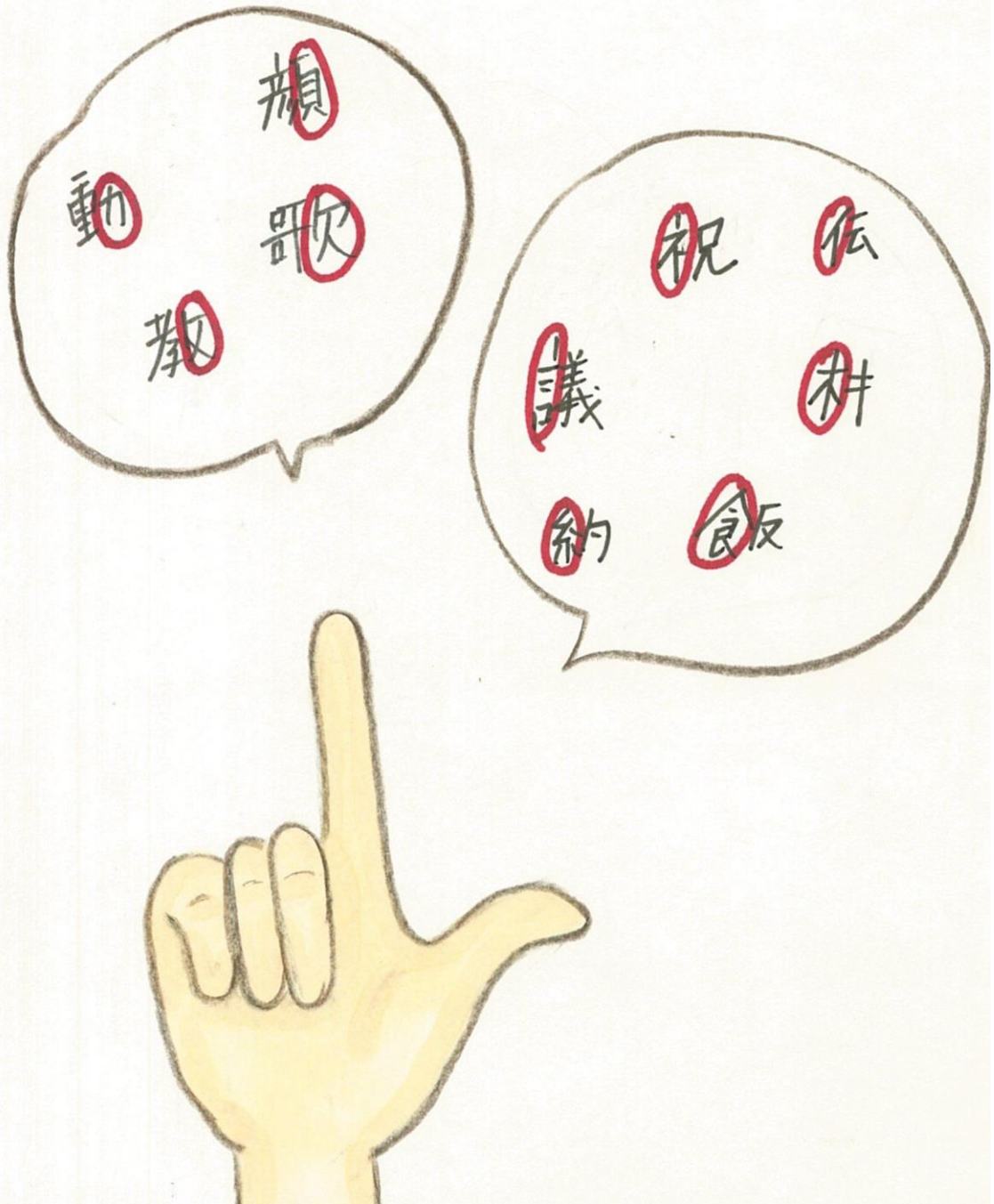
林さんが、部首だけつくりだけを伝えて、
くみあわせるように言った。

「あっ、こうするんだ。」

矢野さんがいうと、林さんがわらった。

「そうそう、すごい。」

林さんは、本当はこんなにやさしい人だったんだ。



チャイムがなった。林さんがふいに矢野さんにこういった。

「おしえさせてくれてありがとう」

「えっ？」

「……、わたしにおしえさせてくれてありがとう」

そのとたん、矢野さんが泣きだした。

「どうした、おいおい。林が矢野をいじめたのか」

黒田君が変なことを言っても、クラスはぎすぎすしなかった。

林さんと矢野さんの間に何があったのか、なんとなくみんながわかっているからだ。



そうして、2回目のチャレンジが始まった。

1回目と、教室の空気はまったくちがっていた。

林さんは7分でテストを終わらせてさっさと100点をとると、まっさきに矢野さんのところに行った。

矢野さんが指さした場所に林さんが一画書き入れる。

林さんの顔がうれしそうで、これがやりたくってやりたくって、テストを早く終わらせたような気がした。

「ぜったい、100点取れるから」

矢野さんの頭をくしゅってなでた。

矢野さんは、一画描いてもらうと、

あっ、ってほおを赤らめ、のこりの字を書いた。

林さんが笑った。



しばらくして、沢井さんも100点を取った。

みんな自分のテストで精いっぱいのはずなのに、なぜか拍手がおこった。
先生まで一緒に拍手をしていた。

沢井さんは、まっすぐに黒田君のところに行った。

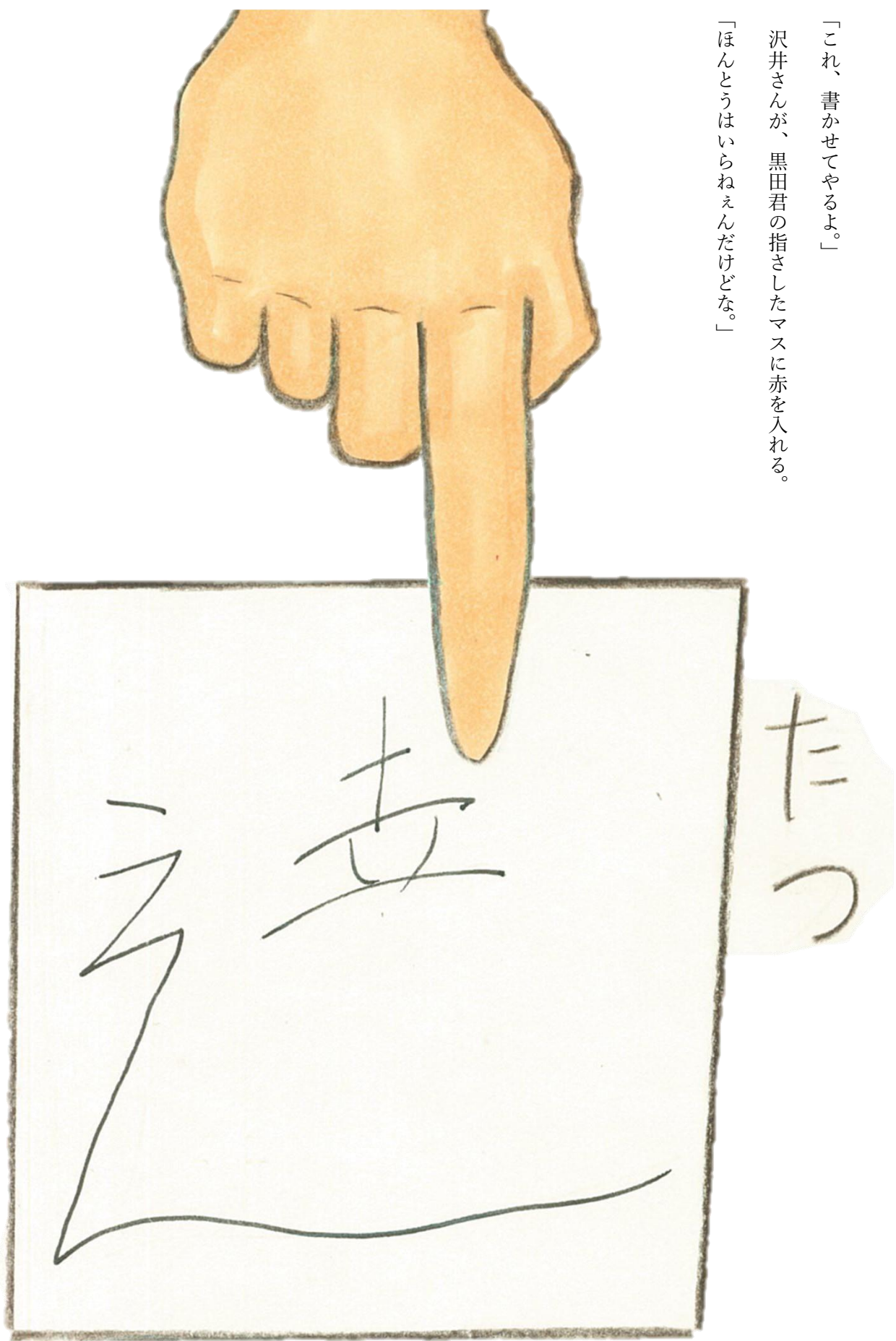
「うぜえよ、書けるから、来なくていいよ」
言葉はきたないのに、顔はうれしそうだった。



「これ、書かせてやるよ。」

沢井さんが、黒田君の指さしたマスに赤を入れる。

「ほんとうはいらねえんだけどな。」



黒田君も矢野さんも自分で書ける字が、
以前に比べかくだんに多くなっていた。

それでも、全部は書けない。

そこにテストで100点をとりおえたみんながかけつけ、

一画、一画と、書いていった。

ぼくも100点をとり、2人のところに行った。

だが、行列が出来て、書くことができなくなっていた。

二人のつくえのまわりを書きおえた子がかこみ、

その輪に入りきれない子は、おうえん団みたいにな

うしろから「フレ、フレ」ってさげんでいた。

これが学校一、仲の悪いクラスなのか。



矢野さん、100点！

黒田君、100点！

教室が、宝くじを当てたように大騒ぎになった。

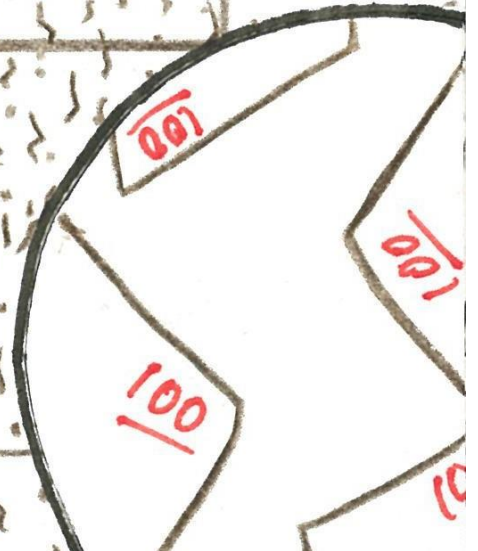
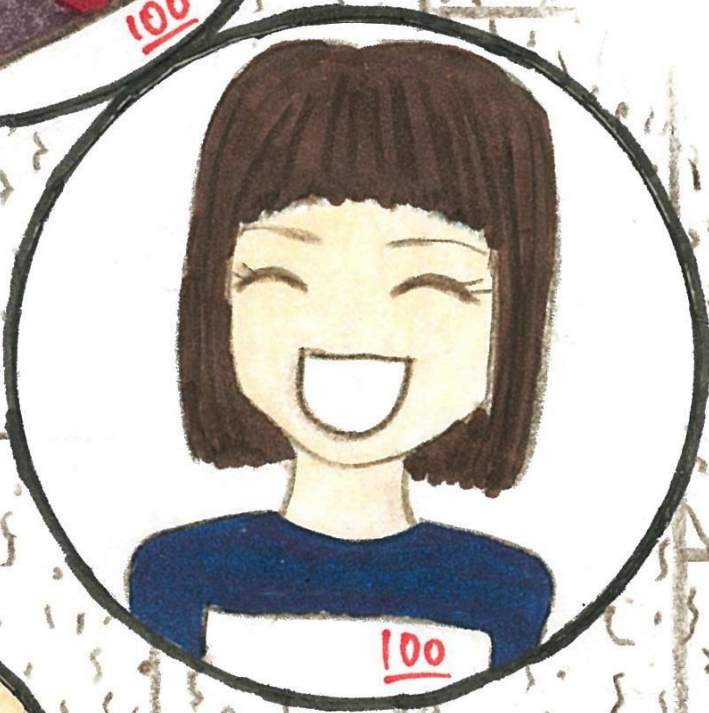
みんな100点だ！

ぼくも天井をみつめ、こみあげてくるうれしさを感じた。

ひとりで100点取ることも楽しい。

でも、みんなを自分ごとにして自分が100点とったら、

みんなで100点をとりにいくのは最高に楽しい。





「わたしの100点ってみんなが力を貸してくれてとれた100点でした。」

沢井さんが、給食の時間にあいさつをした。

そうしてぼくらは牛にゆうでかんばいをした。

「♪、ぼくの100点はみんなのどつてくれた一画が入っている♪」

だれかがふしをつけて歌った歌を気づくとぼくも口ずさんでいた。

読んでくれたみなさんへ

よかよか学院校長 ばななせんせい から

いかがでしたか？

この物語は、ぼくが教師時代にじっさいに体験したことをフィクションをまぜて書いています。多くても7回。

早いときは2回で、本当に全員が100点とれました。

みんなで100点がとれると、クラスがまとまります。

勉強って、自分を幸せにするだけでなく、誰かを幸せにするためにもあるんだって知ります。

そうすると、一人ひとりが周りの人を「自分ごと」で見つめます。

周りの人のことを自分ごとにする、自分のできることは人にやってあげたいと思うようになります。

一人では難しい問題もみんなの力でクリアすることができる気がします。

でも、この小冊子を読んでいるとあっさりと100点とっているように感じると思います。

じつは、とっても難しいのです。

一番のハードルは「テストは競争や優劣を競うもの」っていう考え方です。

「おしえたらズルい」

「助けたらそんをする」

「テストは順番を知るためのモノ。だからみんなが100点だったら自分はすごい人ではない」
って思いがちなのです。

特に、大人たち、おわかりでしょうが、子どものお母さんがそう思っているのです。

お母さんにほめられたいので、子ども達もそう思うのです。

でも時代は変わりました。

おしえることを喜んでいる人

おそわることを楽しんでいる人

助けるのが好きな人

助けられることがじつは人助けになるって気づいた人

そういう人たちが生まれました。

どの人にも優劣がないのです。

そして、自分たちの得意なことを無理なくシェアして、課題をクリアする。

そんな世の中になりました。

今までは答えと問題がはっきりしていました。

でも、今では、課題が複雑で難しい答えがたくさんあります。

こんなときこそ、みんながそれぞれの得意で取り組んだら、100点がとれないテストがない、とぼくは思っています。

競争の時代から協奏、共創の時代へ

この小冊子が何かヒントになったら幸いです。

さあ、みんなで100点取りませんか。

ぼくはこの小冊子を書きました。ぼくの役割はこれでおわりです。

絵を描いてくれる人

手に取ってくれる人

人に紹介してくれる人

教室でやってみる人

つまり、この小冊子を手にしたらみなさんもすでに誰かのテストに赤い字を書いているのと同じなんです。

力を貸してくれてありがとうございます。

ぼくの 100 点はみんなの 100 点でできている

日付 初版第 1 刷発行

作 ばなな先生

絵 こやの

発行所

よかよか学院出版部

〒599-8116 大阪府堺市東区野尻町 402-1-205

印刷所 (株)アサヒコミュニケーションズ

